氏　　名	入澤　あづさ
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	第 103 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論　文　題　目	オウムガイと漆の融合 ―造形における新たな装飾―
審　査　委　員	主査　教授　栗本　夏樹 教授　礪波　恵昭 准教授　笹井　史恵 外舘　和子（工芸評論家） 教授　藤原　隆男

論 文 の 要 旨

本論のテーマは、オウムガイと漆の融合−造形における新たな装飾−である。現在の制作に至る経緯を考察した時、追求してきたことは、“自然のかたちと漆の関係”である。意識することによって、より感じることのできる自然の息吹やエネルギーなど、自然に触発された作品を制作してきた。オウムガイを用いた作品に取り組み始めるきっかけは、学部四回生の時、漆と自然素材を組み合わせた制作に取り組んだこと、それまでの制作の中で感じていたことが、複合的に重なっていると考えられる。

漆工を専攻した頃、黒漆の呂色仕上げに魅力を感じ、漆の艶を生かした表現を行いたいと髹漆を選んだ。その後、加飾の蒔絵に使われる金属粉、螺鈿の貝など、漆と異素材の相互作用で生じる面白さに惹かれ、加飾を専攻する。しかし、従来の漆の加飾とされてきた蒔絵や螺鈿のプロセスに沿って、加飾作品を制作しようとした時、フォルムと加飾の融合という点で、常に疑問を持つこととなった。

通常、漆の加飾として目にすることの多い蒔絵、螺鈿などは、表現したいことに基づいて、イメージを図柄にする。そのイメージの実現のために素材を選択し、器物や立体、パネルの表面上に平面的な加飾として施す。金子賢治の言葉を借りると、「模様、色など、ある意味では平面に還元できる要素での装飾」[1]と言い換えることができる。漆の作品に限らず、装飾を施されるものは、フォルムをキャンバスのように見立て、加飾が施されることが多いように思われる。つまり、平面上で完結させた図柄を、立体上に貼付けてあるがゆえに、フォルムと加飾が別々のものとして存在しているのではないかと感じるのである。言い換えると、フォルムと加飾の関係性が見えにくく、“何

[1] 東京国立近代美術館工芸館編『現代工芸への視点　装飾の力』、東京国立近代美術館工芸館（2009）

故このフォルムにその加飾が必要なのか”という疑問が出てくる。そこにフォルムと加飾の関連性はあるのだろうか。フォルムと加飾が融合した造形はどのようなものかという疑問から他の加飾のあり方を模索したいと考えた。

はじめてオウムガイを作品に取り入れたのは、修士課程の修了制作「遥かなる音色 羽音」・「遥かなる音色 めぶき」（2012）である。通常、漆の加飾では、貝は螺鈿の材料であり、厚貝や薄貝に加工し、切ったり割ったりすることで扱うが、修了制作では、貝そのものを自然素材として乾漆の中に取り入れ、素材を生かした制作を試みた。しかし、完成した作品は、オウムガイのフォルムからイメージが展開された造形にとどまっていると感じ、「オウムガイと漆が互いに関係性を持ちながら融合した造形とはどのようなものか」という問いが生じた。

そこで、博士課程では、「オウムガイと漆が互いに関係性を持ちながら融合した造形とはどのようなものか」と同時に、「必然的装飾とはどのようなものか」という問いを解決しようと考えた。

まず、素材の成り立ちを詳しく考察する必要があると感じ、先行研究で自然のフォルムなどを調べ、オウムガイに対する捉え方を見直すことから始めた。結果、貝のフォルムは、構造から形態へと変化するものであり、螺旋の成長で形成されることが本質であると気づいた。そして、制作する中で、貝と漆の対比を考えると、これらは同じような構造と形態を持つということを見出した。それこそが、自然物を取り入れた造形を制作する上で大事なことであった。そこで、漆のフォルムでも、螺旋の成長プロセスを展開し、形態から構造へと変化させることにより、オウムガイを原点とした、オウムガイの形態・構造から成長する漆のフォルムを造形した。

これにより、オウムガイは、造形において、付加的なものではなく、必然性のあるものとして成立させることが可能となった。つまり、形態・構造・フォルムの核として存在するオウムガイから発想することにより、作品の中でオウムガイは、付加的加飾ではなく、必然的装飾として造形に組み込まれているのである。

従来の漆、加飾における表現は、作品の表層において、様々な試みが行われ工夫されてきた。しかし、造形と加飾の関係性は、依然、見えにくい。今回、筆者が提示する必然的装飾とは、従来の加飾という概念にとらわれず、造形・加飾のプロセスを一度解体することで、新たな装飾を確立したものである。それは、素材の成り立ちを見直し、作品を表層だけではなく深層からも発想し、すべてのプロセスを密接に関係付け、造形と装飾を同時に構築することで可能となった。

本論でもっとも主張すべきテーマとしてあげられる新たな装飾性をもつ漆の造形表現とは、これまでの表層のみの加飾とは異なり、オウムガイと漆が必然的な結びつきで融合し、互いに螺旋を描きながら成長することで、漆の艶と光も装飾として取り込みながら、造形と装飾が一体化した表現である。そして、自然物であるオウムガイが螺旋を描きながら成長した姿を生かし、そのフォルム・成長を可視化する隔壁・さらに真珠層をも装飾とみなし、全てを取り入れながら表現の一部とすることができたと考える。この造形は、自然素材のフォルムを生かした装飾表現であり、オウムガイは、形から増幅されたイメージとともに漆の造形に融合し、表現の核となる。筆者は、これまでの伝統的な加飾技法である螺鈿から発想を転換し、貝からフォルムを展開することで、オウムガイと漆が融合した、造形における新たな装飾を確立したのである。

第１章は、自然の幾何学と応用についての考察。自然の幾何学構造や自然のフォルムのしくみ、線織面が、建築や造形物において、どのように利用されてきたかを知ることで、自身の制作に反映していった。第２章では、筆者の制作技法である発泡胎の乾漆造形について触れる。そして、第３章で、現在の制作に至る経緯を考察した上で、第４章以降に博士課程での取り組みについて述べていく。まず、第４章は、オウムガイの形態・構造から成長する漆のフォルムであり、作品へのアプローチと制作プロセスの観点から制作について述べていく。第５章では、作品の構成の観点から、オウムガイと漆が互いに関係性を持ちながら融合した造形ついて論じ、第６章で、必然的装飾とはどのようなものかを考察し、新たな装飾性をもつ漆の造形表現について述べていきたい。

審 査 結 果 の 要 旨

審査作品

１.「遥かなる音色　穹(きゅう)の響」2012 年　H32, W140, D30 cm

２.「遥かなる音色　穹(きゅう)の光」2012 年　H18, W120, D48 cm

３.「遥かなる音色　穹(きゅう)　弦(げん)」2013 年　H23, W123, D12 cm

４.「遥かなる音色　風奏(ふうそう)」2014 年　H43, W165, D90 cm

５.「遥かなる音色　時空を翔る」2017 年　H120, W180, D48 cm

博士課程（後期）課程　本審査における作品展示では、博士課程で取り組んだ作品５点が大ギャラリーに展示された。

入澤氏は、学部時代や大学院進学後も一貫して、“自然のかたちと漆の関係”について考察し作品を制作してきた。意識することによって、より感じる事の出来る自然の息吹やエネルギー、生命の響鳴などをテーマに作品を作り続けている。

入澤氏の作品を特徴づける大切な要素として作品に組み込まれたオウムガイが上げられる。氏が最初に作品にオウムガイを使用したのは修士課程の修了作品である「遥かなる音色　羽音」2012 年であるが、この作品では、オウムガイを自身の作り出した乾漆による形態の中に取り入れ、自然素材を生かした制作をすることが試みられた。

博士課程に進学後、氏は自然素材を生かしただけの表現ではなく、もっと漆と自然素材がダイレクトに結びついた作品、造形的に融合した作品を作りたいと考えるようになった。

また、氏は、硬質発砲ウレタンという発砲素材を胎にした乾漆作品を制作しているが、どんな形でも削りだしやすい素材であるだけに、自分の造形意思を明確にし、作品の内部構造にまで意識を向ける必要があると考えるようになった。そこで試されたのが、作品を外側のイメージから発想するだけでなく、内部構造からも発想しフォルムを造形するという考え方である。ここでいう内部構造とは、作品の骨格とも呼べるものであるが、実際にフォルムを形づくる“素材としての骨格”だけなく、作品のフォルムを発想･展開する段階における“発想の骨格”という意味も含んで用いられている。言い換えれば、制作のプロセスにおいて、“素材の骨格”だけでなく“発想の骨格”を持つことで、作品の無駄な要素を削ぎ落とし、形態の曖昧さを回避し、説得力のある必然性を持つフォルムが成立するという考え方である。

ここで入澤氏の制作プロセスを具体的に説明する。氏のオウムガイを取り入れた一連の作品において共通していることは、オウムガイが発想の原点であるという点である。全てのフォルムはオウムガイを元に発想･展開されたフォルムであり、自然のかたちとの融合を目指している。オオムガイの延長線上に造形される漆のフォルムは、貝が自らの結晶の成長で殻を構築していくのと同様に“作品の骨格”を元に漆の作業工程の積み重ねで成長するフォルムであると氏は考えている。また、氏は、オウムガイが螺旋構造であるという点に着目し、オウムガイから発想した形態を折り紙の螺旋折り構造の展開と合わせて考えることで、オウムガイの持つ螺旋構造を生かしつつ、自然な形で漆のフォルムと融合させる新たな方法を考案している。つまり漆の造形部分の形態を発想し、展開する段階で“螺旋折りの折り紙モデル”を用いて成長するフォルムを作り出しているのだ。また、螺旋

折りが直線の集積である線織面であることから、滑らかに連続した面の変化をもつ構造であり、漆の呂色仕上げの艶や光を生み出すのに最適なフォルムになることを発見した。

次に、螺旋折りで作られたマケットからスタイロフォームマケットに変換する作業を行う。この段階で、フォルムが線織面から複曲面へと置き換えられることになる。

入澤氏が制作に用いている技法は発砲素地による乾漆技法である。スタイロフォームマケットで確認されたフォルムから硬質発砲ウレタンを使い実寸で削りだす作業が続く。硬質発砲ウレタンを使う理由として氏は、成形の自由度の高さ、薄く繊細なフォルムへの対応、厚みに変化がつけられる点などを上げている。この時点で、カットしたオウムガイの実物が硬質発砲ウレタンで削りだされたフォルムと組み合わされる。

硬質発砲ウレタンを実寸で削りだす作業が作品の善し悪しを決定すると言っても過言ではなく、作業は慎重に進められ、一ヶ月間から二ヶ月間かけて削る場合もある。続いて形を削り出した素地に、生漆で素地固めをし、糊漆で麻布を貼り重ね、下地を積み重ね作品に強度を与えて行う。次に黒漆で中塗りや上塗りを何度も行い研ぎや磨きの工程を経て作品か完成する。

入澤氏の一連のオウムガイと漆を融合させた作品を特徴づけるのは、黒漆の艶にオウムガイの装飾性を併せ持つ漆の造形であるという点が上げられる。黒光りした乾漆によるフォルムに異素材であるオウムガイを組み合わせることで作品に新鮮なコントラストと装飾性が生まれる。オウムガイの螺旋構造から引き出された漆のフォルムは、余剰な部分を徹底的に削ぎ落とすことによって、結果的にオウムガイの装飾性を際立たせる効果をもたらしている。

審査教員からは次のような意見が述べられた。

① 立体を扱う多くの工芸作家、美術家にとって、新たなかたちを見出すこと、築くことは共通のテーマであるが、入澤あづさ氏はオウムガイのもつ螺旋構造を起点に置くことで独自のカタチを展開させ得ること、また、そのような方法によって、他の呂色仕上げの漆芸作品とは異なる表現になり得ることを、自らの実作とともに力強く示している。

② 自然の外観的模倣は、いわゆる「写生」をもとにした表現をはじめ、これまでも幾多の工芸家、美術家によって創造のための有効な方法論とされてきたが、入澤氏は、自然物の外見よりも構造に注目し、それを制作の起点に置いていることに特徴がある。また、オウムガイをフォルムの起点のみならず、装飾性の要素としても捉え、造形との関係にも言及している。その意味で、タイトルにみる「装飾」は、いわゆる「加飾」としてのそれを遥かに超えた新たな装飾概念を提示しようとする試みでもあろう。

③ 発表された作品はいずれも完成度が高く、論文と合わせて説得力を持つ。強いて課題を挙げれば、緊張感あるフォルムゆえ、展示の際の金属の支柱などの扱い、つまり作品の自立性と構造の関係を、さらに吟味、検討していく余地を残しているということであろうか。空間における光との関係も、“作品の存在の仕方”を探っていく際の重要な要素となるだろう。しかし、そうした今後の課題に取り組む意欲もまた、入澤氏のプレゼンテーションから窺われ、漆工の博士として学位を取得するにふさわしい内容の論文と作品であると判断する。

④ 入澤氏の作品には，新たな生物を生み出そうとしているような神秘さがみられる。とくに，今回の作品で注目するべきは，論文にも書かれているとおり，入澤氏が使ってきた螺旋折りマケットが数学でいう「線織面」であることを認識した結果，表現が直線的なものから却って柔軟

で豊かなものになった点であろう。この点で，本論文は，理論的考察と作品が有機的に結びついたものになっていると言え，高く評価できる。

⑤ 新作の大型の立体作品は非常に見応えがあり、彼女の本研究の集大成に相応しい作品である。壁展示から台展示に切り替えたことが、作品の魅力をよく引き出していた。論文とも整合性があり、非常に質の高い展示内容である。

⑥ 本審査のプレゼンテーションでも最新作を交えて簡潔かつ明快に研究の要点がまとめられていた。最新作を含めた作品が論文と一体となって展開されていることは作品展示でも十分確認でき、総体として、本学美術研究科博士（後期）課程の学位の水準を超えていると判断された。

以上の意見のように提出作品は新たな装飾概念を提示する漆造形作品であり、博士本審査に相応しい充実した内容であると高い評価を得た。展示の際の金属の支柱などの扱いなど作品の自立性と構造の関係を、さらに吟味、検討していく余地を残しているが今後の取り組みで改善できると思われる。論文に関しても理論的考察と作品が有機的に結びついたものになっている点が高く評価された。本審査結果としては、審査員全員一致で、入澤あづさ氏の博士（後期）課程本審査を合格と判定した。